

だから、見たまへ、信仰家が
悪魔といつしよにゐることもある。

世間人

いや、信仰家にとつてはだね、
すべてのことが、方便なのさ。
だから、ブロッケンの上上でさへ、
祈禱會が、よく開かれるよ。

踊り子

おや、もう一組、仲間が来るのか？
遠くで、太鼓の音がするな。
ちよつと黙つて！ あゝ、葦の間で
蒼鷺どもが鳴きつれてるのが。

振りつけ師

どいつも、無暗に脚を上げてさ！
踊り勝たうと、大童だな！

背むしも暴れる、のろまも跳ねる、
傍の見る眼にやお構ひなしだ。

胡弓弾き

どいつもこいつも、相手を憎んで、
隙もあらばと覗つてゐるのだ。

襄笛パツパイプは、野獸をなだめる

あのオルフォイスの琴の役目さ。

獨斷論者

おれが、他人に惑はされるか、
批判も、懷疑も、糞をくらへた。
悪魔も必ず何かであるのさ、
さもなきや、悪魔は無いわけだらうが？

観念論者

おれの心のファンタジーが
今日は、あんまり跳梁し過ぎる。

これが、残らず自分のものなら、
どうやら、おれは、阿呆に近いぞ。

實在論者

ものの本質といふやつばかりは
厄介千萬で、腹が立つな。
こゝへ来てみて、おれは始めて、
足の構へが、ぐらつき出したよ。

超自然論者

こゝにゐるのは、まったく愉快だ、
おれは、奴らと仲よく遊ぶよ。
何故つて、悪魔があるものならば、
結論として、善い靈もある。

懷疑論者

焰のあとなどつけまはしても、
寶の在りかが知れるもんかい。

魔ものと迷ひは、韻が合ふから
こゝは、わたしの獨擅場だよ。

樂長

葉かけの蛙、草間のこぼろぎ、
手のつけられない素人どもだな！
蠅のほそくち、蚊のとがり鼻、
こつちは、まだしも音楽家だよ！

社交家たち

「莫愁」と人が呼ぶのは、
のどかな仲間の集まる場所さ。
だが、もう足では歩けないから、
逆立ちをして歩いてゐるのだ。

零落者たち

昔は、何かと餘澤もあつたが、
天なる哉、命なる哉だ！

恵みぶかい自然に貰つた
 靈に貰つた羽根があるなら、
 わたしの軽い踵のあとから、
 跟ついていておいでよ、薔薇の丘まで！
 管 絃 樂 (ピアノニッシモ。
 雲の流れ、霧の紗うす紗
 高い空から明るみ初はじめる。

そら、妖精の新ら手を通るぞ、
 手足のごつい妖精さまだぞ。
 ブ ッ ク
 さう、どたばたと足を踏むなよ、
 象の子供ちやあるまいしさ、
 今日いちぼんの暴れん坊は
 はてな、ブククめ、おまへの筈だが。

アーリエル

靴の底まで踊りやぶいて、
 跣で歩くほかはあるまい。

鬼 火

わたしたちは、沼から來ました、
 生ひ育つたのは、沼の中です。
 でも、直ぐかうして踊りにはひれば、
 これでも、いつばし伊達者でせうが。

隕 石

天から、おれは、降つて來たのだ、
 星とも輝き、火とも燃えたが、
 今は、草葉に大の字なりだ——
 誰か、起して呉れ手はないかな？

巨大漢たち

どけ！ どけ！ 邪魔だぞ、そこいら一面！
 かうして、草なぞ踏んづけてやる、

木の葉のそよぎ、葦に立つ風、
かくて、もの皆、消えうせてゆく。

曇り日

野。

ファウスト。メフィストフェレス。

ファウスト

苦しんでゐる！ 絶望してゐる！ みじめに地上を徨ひあるいたすゑに、たうとう捕へられたのだ！ 罪人として牢獄ウツマに繋がれ、おそろしい責苦に遭つてゐるのだ、あの優しい、ふしあはせな女が！ こんなことに！ —— 油断のならない、やくざな悪魔め、これほどの大事を、きさまはおれに隠してゐたな！ —— さあ、さうして、突つ立つ

てゐろ、いつまでも！ その物凄しい眼の玉を、顔ちゆう、ぎよろぎよろ動かしてゐろ！ 立ちはだかつて、おれに反抗してゐろ！ 見るも穢らはしいその姿で！ 捕へられたのだ！ 救ひがたい苦しみだ！ 悪魔の手へ落ちたのだ、人を裁く無慈悲なやつらの手のなかへ！ だのに、きさまは、その間ちゆう、おれを引き廻して愚にもつかない氣晴しをさせ、日まさに募る女の苦痛をおほひ隠し、たつた一人滅びてゆかせようとしたのだ！

メフィストフェレス

あの女が、始めてぢやありませんぜ。

ファウスト

犬め！ 穢れた畜生め！ —— こいつの姿を變へてくれ、無限の靈よ！ この蛆蟲を、もとのとほり、犬の姿に變へてくれ、こいつが夜中によくやるやうに、おれのまへへ駈け寄つたり、おとなしい通行人の足もとへ吠えついたり、倒れた人の肩さきへ足をかけたりするやうな、犬の姿に變へてくれ。こいつの好きな、もとの姿へ返してやつて、おれのまへで砂のなかに腹ん匂ひに這はせてくれ、おれは、こいつを足蹴にしてやる、この罰當りの畜生を！ —— あの女が、始めてではないと！ この酷たらしさ！ この残忍さ！ およそ人間の魂では測り知られないほどのことだ、あゝいふ女が一人ならず、悲惨のどん底に沈むといふのは、しかもその最

初の一人が、のたうち廻る死の苦しみに遭ひながらも、あの永劫に罪を赦す神の前で、あとに
 續く總ての者の罪業を償ひ得なかつたといふことは！ おれは、魂の底まで、骨の髄まで、か
 きむしられるやうな氣がする、たつた一人のあの女の苦しみを思ふだけでも。それを、きさま
 は、のんきさうに幾千人の運命を嘲りわらつてゐるのだな！

メフィストフェレス

さうなると、われわれの智慧も、また行きづまつた形だな、あなたがた人間は、氣ちがひに
 なるところだな。なぜ、あなたは、われわれと手をつないだんです、それが、やり通せないく
 らぬなら？ 空は飛びたし、眼暈は怖しといふわけかな？ 一體、われわれが、あなたに無理
 やりに近づいたんですか、それとも、あなたが、われわれに？

ファウスト

おい、食ひつきさうに、齒をむき出すな！ おれは、胸がむかむかする！ —— 偉大な莊嚴
 な靈よ、おまへはおれを尊んで姿を見せてくれたのに、おれの心を、おれの魂を知りつくして
 ゐる筈なのに、なぜ、こんな恥知らずの道連れをおれに引き合はせてくれたのだ、こいつは人
 の禍ひを喜び、人の破滅に舌なめすりをするではないか？

メフィストフェレス

それで、おしまひか？

ファウスト

女を救つてくれ！ さもないと、唯ではおかぬぞ！ おそろしい呪ひをかけてやるぞ、何千
 年の後までも！

メフィストフェレス

裁判官のかけた細目は、わたしにだつて解けるものか、牢屋の錠前が外せるものか。—— 救
 ふなら、自分で救へだ！ —— 一體、誰です、女を罪に落したのは？ わたしか、あなたか？

(ファウスト、荒々しく見廻す。)

メフィストフェレス

雷でも掴まへて、わたしを焼き殺すつもりですか？ お生憎だが、みじめな人間の力では、
 雷様はどうにもならない！ 罪咎もない議論の相手を粉碎しようなどといふのは、まさに暴君
 のしわざだな、言ひ負けた腹癒せに、そんな亂暴を働くなら。

ファウスト

おれを、あそこへ連れてゆけ！ 女を助け出さなければ！

メフィストフェレス

だが、どうします、あなたは危険にさらされますぜ？ 知ってるでせう、あの町であなたの犯した人殺しの罪は、まだ消えてはゐませんぜ。殺された者の墓の上には、復讐の靈がさまよつてゐますぜ、殺した奴の歸つて来るのを、待ち構へてゐますぜ。

ファウスト

今さららしく、君の口からそんなことを聞かされるのか？ 世界ぢゆうの死と人ごろしを、きさまといふ無頼漢のせゐにしてやる！ おれを案内しろといふのに、あいつを救ひ出せといふのに！

メフィストフェレス

ぢやあ、連れてゆきますよ、わたしの力に及ぶかぎりやりますよ。ですがね！ わたしにしたつて、天と地とを支配する全權を握つちやゐないでせうが？ 牢番人の氣を失はせてやりますから、その間に鍵を奪つて、人間の手で女をそとへお出なさい！ わたしは、張り番をしてゐます！ 魔法の馬を待たせて置いて、お二人を連れて逃げませう。それつくらゐは、わたしにも出來ます。

ファウスト

さあ、早く、行かう！

夜

廣野

ファウスト、メフィストフェレス、黒馬に乗つて奔りすぎる。

ファウスト

何をやつてるのだらう、あの仕置場のまはりで？

メフィストフェレス

さあ、何を煮てるんだか、拵らへてるんだか。

ファウスト

舞ひあがつたり、舞ひ下りたり、身をこゝめたり、折り曲げたりしてゐるな。

メフィストフェレス

夜

魔女のしわざですよ。

ファウスト

撒きものをして、淨めてゐるな。

メフィストフェレス

もう過ぎた！ もう過ぎた！

牢 獄

ファウスト、鍵の束と、燈火かみを手にもつて、鐵の扉のまへに立つ。

ファウスト

久しく忘れてゐたな、この身顛ひを、

人間のすべての苦しみが、おれを襲つて来る。

ここに、あの女が住んでゐる、この濕つた壁のなかに、

あいつの罪は、やさしい心の迷ひがさせたのではないか！

ためらふのか、女のそばへ行くのを！

怖いのか、女にもう一度會ふのが！

行け！ 尻ごみすれば、死をひき寄せるばかりだぞ。

(鍵をとり直す。奥から歌ふ聲。)

母は、浮れ女、

われを殺しぬ！

父は、悪もの、

われをくらひぬ！

をさなき妹

骨を拾ひて、

冷たき土に埋めぬ。

美しき森の小鳥となりて、

われは飛ぶ、われは飛ぶ！

ファウスト (鍵をあけて)

あの女は夢にも知るまい、戀びとが歌に聴き入り、
鎖の鳴る音、藁のきしめきに耳を傾けてゐようとは。

(踏み入る。)

マルガレーテ (寢臺に身を隠しながら)

あゝ！ あゝ！ 誰か来るわ。責め殺しに！

ファウスト (低く)

静かに！ 静かに！ おれは、おまへを救ひに来たのだ。

マルガレーテ (彼のまへにまろび出て)

あなたも人間なら、わたしの苦しみを察して下さい。

ファウスト

聲を立てると、番人が眼をさますぞ！

(女の鎖を掴んで外さうとする。)

マルガレーテ (跪いて)

誰が、あなたに、あなたのやうな獄卒に

あたしの仕置きを言ひつけたんです！

今からあたしを引き出すんですか、この眞夜中に。

あたしを可哀さうだと思つて、どうか生かしておいて下さい！

明日の朝でも遅くはないでせう？

(立ち上る。)

あたし、まだ、こんなに若いのに、こんなに若いのに！

もう死ななければならぬんだわ！

なまじ綺麗に生れたばかりに、身を滅ぼしてしまつたんだわ。

あの方が傍にゐて下さつたのに、今は遠くにおいでだわ、

花環もむしり取られて、花びらも散つてしまつたわ。

そんなに強く掴まないで！

ゆるしてよ！ あたし、あなたに何をしたの？

これほど頼んでも分らないの、

今始めてよ、あなたに會つたのは！

ファウスト

この悲惨な姿を、とても見てはゐられない！

マルガレーテ

あなたは、あたしをどうにでも出来るわ。
でもその前に、坊やお乳を飲ませてよ。
一晩ちゆう、あたし、坊やを抱いてゐたのよ、
みんなして坊やを取り上げたの、あたしを苦しめようと思つて、
みんなして言ひ觸らすの、あたしが坊やを殺したつて。
あたし、一生、嬉しい思ひは、もう出来ないわ。
みんなして、あたしのことを歌にうたふの！ いぢの悪い人たちよ！
或る小説のおしまひが、さう書いてあつたからつて、
誰がそれを、あたしのことにしろと言つたの？

ファウスト (身を伏せて)

戀びとが、おまへの足もとにひれ伏してゐるのだ、
囚はれの苦しみを救はうとして。

マルガレーテ (共に、身を伏せて)

さあ、いつしよに跪いて、聖者さまにお祈りしませう！

ね！ この階段の下に
この闇の下に

地獄が煮えたぎつてゐるのよ！

悪魔が、

恐ろしい聲をして、

わめき立ててゐるのよ！

ファウスト (聲高に)

グレーチヒェン！ グレーチヒェン！

マルガレーテ (耳を欬て)

あら、あの方の聲だわ！

(跳び上がる、鎖が解けて落ちる。)

何處においでだらう？ たしかに、お呼びになつたわ。

あたし、許されたんだわ！ もう誰あれにも邪魔はさせない。

あの方の首すぢにしがみついて、

あの方のお胸に抱かれよう！

お呼びになつたわ、グレーチヒエンて！ 入口に立つていらつしやるわ。
 地獄の叫びごとと物音のなかから、
 おそろしい悪魔の嘲りのなかから
 やさしい、いとしいお聲が聞えたわ。

ファウスト

おれだよ！

マルガレーテ

あなたね！ あゝ、もう一度、仰しやつて！

(彼を掴む。)

あなただわ！ あなただわ！ あの苦しみは、どこへ消えてしまつたらう？
 牢屋のおそろしさは？ 鎖の恐ろしさは？

あなただわ！ あたしを救ひに来て下さつたのね！

あたし、救はれたのね！ ——

そら、もうそこに、往來が見えるわ、

始めて、あなたにお目にかかつた。

それから、たのしい、あのお庭も、
 そら、マルテと二人で、あなたをお待ちした。

ファウスト (連れ去らうとして)

いつしよに、おいで！ いつしよに、おいで！

マルガレーテ

あゝ、待つて！

あたし、こゝにゐたいわ、あなたがゐて下さるなら。

(愛撫する。)

ファウスト

早く！

早くしないと、

とりかへしのつかないことになる。

マルガレーテ

どうなさつたの？ もう接吻もお忘れになつたの？
 ねえ、あなた、ほんのちよつとお別れしてゐたのに、

もう接吻もお忘れになつたの？
 あなたの首にお縫りしてゐて、なぜかう心細いんでせう？
 いつもはあなたのお言葉を聴くと、あなたのお眼を見ると
 まるで天國があたしのそばへ下りて來たやうだつたのに、
 あなたは、息のつまるほど、キスをして下さつたのに。
 ねえ、キスして！
 そんなら、あたしがするわ！

(彼を抱きしめる。)

まあ、悲しい！ 冷たいお口だわ、
 啞のやうなお口だわ。

どこへ消えてしまつたんだらう
 あなたのお情けは？
 誰にとられてしまつたんだらう？

(顔をそむける。)

ファウスト

さあ！ おれに、ついておいで！ しつかりおし！
 おれは、千倍の情熱で、おまへを愛してやる。
 だから、ついておいで！ お願ひだといふのに！

マルガレーテ (ふり向いて)

でも、ほんたうにあなたかしら？ きつと、あなたなのね？

ファウスト

おれだよ！ いつしよに、おいで！

マルガレーテ

鎖を解いて下さつたのね、

あたしをまた、膝に抱いて下さるのね。

まあ、どうしてでせう、あたしを厭だとはお思ひにならないの？ ——
 御存じなの、ねえ、どんな女を救けようとなさるのだから？

ファウスト

おいで！ おいで！ もう夜が明ける。

マルガレーテ

お母さんを、あたし、殺したのよ、
坊やを、水へ投げ込んだのよ、

あなたとあたしの、大事な坊やだつたでせう？

あなたの子でせう。——ほんたうに、あなたなの？ さうかしら。

ねえ、手を握らせて！ やつぱり夢ぢやないわ！

この、やさしい手！——あら、こんなに濡れて！

お拭きなさいよ！ きつと、

血がついてるのよ。

あゝ、神さま！ 何てことを、あなたはしたの！

剣をさめて、

お願いだわ！

フアウスト

過ぎたことは、言はないでくれ、

おれは死んでしまひさうだ。

マルガレーテ

いゝえ、もつと生きてゐて下さらなければ！

あたし、みんなのお墓のことをお願いするわ。

お世話をして下さいね

明日からでも。

お母さんのを、いちばんいゝ場所に立てて、

兄さんのを、すぐそのそばへ、

あたしのを、少うし離して、

あんまり遠くに離しちや厭よ！

それから、坊やのは、あたしの右側にね。

ほかには誰あれも、あたしの近くへ埋めないで頂戴！——

あたし、あなたのそばにお縫りしてゐるのが、

それは嬉しい、それは楽しい幸福でしたわ！

でも、もうそんなことは出来ませんわ。

何んだか、あたし、無理にお傍へすり寄らうとして、

あなたに衝きもどされさうな気がするの。

でも、やっぱりあなただわ、そら、そんな優しい、お情けぶかいお眼をして。

ファウスト

おれだと言ふことが分つたら、さあ、おいで！

マルガレーテ

あつちへ？

ファウスト

外へ。

マルガレーテ

そとは、墓場なの、

死が待ち伏せをしてゐるの、そんなら行くわ！

こゝから、まつすぐに静かなお墓へ

それから先きへは、ひと足も厭——

あら、もう行つてしまふの？ おゝ、ハインリヒ、あたしも一緒に行けたら！

ファウスト

行けるとも！ 行かうと思ひさへすれば！ 戸は明いてゐるんだ。

マルガレーテ

あたし、行けないわ、何んの望みもないんだもの。

逃げたつて、何んになるの？ みんなして、あたしを待ち構へてるのよ。

みじめだわ、乞食をしなけりやならないのよ、

良心に責められなければならぬのよ！

みじめだわ、知らない國をさまよふうちに、

また掴まつてしまふんだもの！

ファウスト

おれが、そばについてるよ。

マルガレーテ

早く！ 早く！

かはいさうな坊やを助けて！

あつちよ！ その道を、どこまでも

川上へ、

橋をわたつて、

森へはひると、

左側に、柵があるわ、

沼のなかよ。

すぐ引き上げて！

あゝ、浮き上らうとして、

まだ、もがいてゐるわ！

助けて！ 助けて！

ファウスト

さあ、氣を確かに！

たつた一足で、外へ出られるんだ！

マルガレーテ

早く山を越したいわねえ！

ね、あすここに、お母さんが石の上に坐つておいでだわ、

あゝ、首すぢから、ぞうつとするわ！

ね、あすここに、お母さんが石の上に坐つておいでだわ、

あゝ、お頭が、あんなに揺れて。

手招きもなさらぬし、顔きもなさらぬわ、氣分がお悪いのよ、

長いこと寝ておいでなの、もうお眼が醒めないのよ。

寝ていらつしやるの、あたしたちが幸福になれるやうにつて。

あのとときは、ほんとに楽しかつたわねえ！

ファウスト

いくら頼んでもだめだ、いくら言ひ聞かせてもだめだ、

仕方がない、抱いて行かう。

マルガレーテ

離して！ いや、亂暴しちやあ！

そんなにひどく掴まないでよ！

ほかのことは、何でもしてあげたぢやないの。

ファウスト

夜が明けて来た！ グレーチヒェン！ グレーチヒェン！

マルガレーテ

夜が明けたの！ あゝ、夜が明けたわ！ けふが、最後の日だわ。
あたしの結婚する日だわ！

誰にも言はないでね、あなたがグレーチヒエンのところに泊つたことは。
まあ、この花環は！

たうとう、こんなになつてしまつた！

また、おめにかゝりませうね、

踊り場でないところでね。

みんなが、押し寄せて来たわ、でも何んにも聞えないわね。

廣場も、往來も

人がはひり切れないくらゐよ。

鐘が鳴るわ、宣告がすんで、合圖の小枝を二つに折つたわ。

あゝ、あたしを縛り上げて、引き立てるのよ！

もう首切臺に引き据ゑられたわ。

そら、みんなの頸にも飛んでゆくのよ、
わたしの頸を斬つた刀が。

ね、あたりいぢめん、墓場のやうに静かになつたわ！

ファウスト

あゝ、なぜおれはこの世のなかに生れて来たのだ！

メフィストフェレス、外に現れる。

メフィストフェレス

さあ！ 急がなきや、だめだ。

何を愚圖々々してるんです！ 何をくどくど言つてるんだ！！

わたしの馬は、身顛ひしてゐる、

もう朝ですぜ。

マルガレーテ

誰、地の底から出て来たのは？

あのひと！ あのひと！ ね、追ひ返して！

あのひと、何をしに来たの、この清らかな場所へ？

あたしをつれに来たのね！

ハインリヒ！ ハインリヒ！

聲 (奥から、次第にかすかに)

(ファウストと共に去る。)

メフィストフェレス (ファウストに)

さあ、こつちへ！

ファウスト

おまへを助けに来たのだ！

マルガレーテ

神さまのお裁きに！ 神さまに、あたし、この身をお任せします！

メフィストフェレス (ファウストに)

行かう！ 行かう！ 女と一しよに、捨てて行くぜ。

マルガレーテ

天にいます父よ、あたくしは、あなたの僕しもべです！ お救ひ下さい！

あゝ、天使たち！ 聖者さま方、

どうぞあたくしをとり圍んで、お護り下さい！

ハインリヒ！ あたし、あなたが怖いわ。

メフィストフェレス

この女は、裁かれたのだ！

聲 (上から)

救はれたのだ！

あとがき

場面の順に、解説めいた事を書いて見る。

「献辭」と二つの序曲とは、ゲーテが長く果たさなかつたこの作品の完成を思ひ立つた時に書いたのである。

「ファウスト」第一部の制作は、三つの時期に分れてゐる。初稿は、一七七〇年代の前半、ドイツ文學史にいふ「風濤時代」の氣負つた天才主義的な文學者たちの輪のなかで、二十代半ばの詩人が故郷のフランクフルトで書き、間もなくワイマールの宮廷へ迎へられた時には、草稿のまま携へて行つた。作者の死後に發見されたワイマールの或る女官の筆寫本が、作者の公けにしなかつた初稿の原形を傳へてゐる。謂ゆる「稿本ファウスト」で、韻文一四四一行と散文三場面とからなる。

ワイマール公國の大臣となつて、十年あまり政治に力をそゝいだあと、八〇年代の後半に、イ

タリにのがれて漸く藝術家として再生した時にも、ゲーテはローマの美しい庭園などで、「ファウスト」の足りない部分を二ところ三ところ書き、それと歸國後手を入れた初稿の大部分とを併せて、一先づ「斷篇」と名づけて一七九〇年に著作集に収めた。韻文ばかり二一三七行である。その後フランスへ出征したりしたあと、ゲーテは望みどほり政治の表面から退き、またシルレルとの交わりなどから創作の気分にも恵まれて、世紀の變り目のあとさき何年かに、「ファウスト」第一部を今みるやうな形に仕上げ、一八〇八年に別な全集の一卷に入れた。韻文四六一二行と散文一場面とである。

「獻辭」は、この時期の始め、もう五十に手のとどかうとする作者が、「風濤時代」の忘れ形見とも言へるこの戯曲を、三度書き繼がうとした時の心情をうたつたものである。第一行で呼びかける「揺らめく影像の群れ」とは、舊稿のまゝでは描寫の定まらないファウスト、メフィストなどの姿をさすのであらう。

「劇場内の序曲」には、自身ワイマアルの宮廷劇場の管理にあつたゲーテの苦がい體驗が反映してゐる。「柱も立つたし、板も張れた」(第三九行)といふやうな、この頃にはもう廢れた旅まはりの小屋がけを舞臺にとつたのは、詩的な假托で、當時はそれこそ「本水もよし、火焰もよし、見あげる岩壁も結構」(第二三七行)な固定舞臺の工學技術の、よかれ悪しかれ一つの發展期だつたのである。

「天上のブローグ」の、悪魔が天に伺候して天主と言葉を番へる筋は、舊約聖書の約百記を典據とするといふ。中ごろ、「風濤時代」の傾向から脱れるために、特にスピノザを學んだゲーテは、この時期には、こゝに見るやうな汎神論的な神の表象と結びつけて、傳説では地獄に墮ちるファウストの救済を構想し、その結末を第二部に先だつてこゝに暗示したのである。

「夜」から、ファウストが登場する。

ファウスト傳説は、もと／＼中世この方の鍊金術に對する時の人びとの觀察のなかから生まれたもので、次第に蓄へられた同じ系統の説話が、偶々ドイツの宗教改革の頃に生きたゲオルク・ファウスト(略、一四八〇—一五四〇)といふ鍊金術士の記録のまはり、集合傳説を形成したのだといふ。鍊金術士が目的としたのは、低い金屬元素を高い元素に變へて行つて最後に金をつくることと、藥の刺戟で老衰を防いで無限に壽命をのばすこととの二つだから、謂はば彼らは、神だけが知る「全智全能」と「不死不老」とを、人間の手で創り出さうとしたわけである。自然それが、悪魔のわざと罵られ勝ちなところから、いつか傳説には生きた悪魔が登場して主人公に超自然力を貸すことにもなつたのであらう。だから、ファウスト傳説のおもしろさは、さういつた神と悪魔の筋のかけに、今いふ二つの絶對概念と人間の能力の限界とが、まさまさと對比されるところにある。それを文藝復興期この方の一般のこゝろに適ふやうに書きあらはしたのが、一五

八七年にフランクフルトから出た、俗にいふシュピース本以下の、おびただしい数のファウスト物語や、その系統をひく通俗劇、人形芝居などで、やはり物語本に據つたマアロウの「フォースタス博士の悲劇」(一五八九年)なども、側面から本國の民間劇の流行をたすけたことになる。その後、流行にまかせて、たゞの道化芝居になり下つたこの種類の劇のなかに始めの精神をみ出し、それを十八世紀後半の哲學と科學の基礎の上で描き深めようとして果たさなかつたのを、レッシングのファウスト劇断篇(一七六〇年前後)とすれば、作者自身がその時代の一流の科學者だつたことにも助けられて、およそ詩にゆるされる最高の表現にこれを導いたのが、ほかならぬゲーテの生涯作である。

稿本ファウストは、人形芝居の餘韻をとどめる主人公の獨白に始まり、ワアグネルとの對話(第六〇五行まで)のあとに、大きな空白を残して、三場さきの學生の登場(第一八六八行)へ續いてゐる。若いゲーテは、彼の仲間を導いた批評家ヘルデルの天才的な風采を、舞臺の主人公にうつしたといふ。

ノストラダムス(第四二〇行)といふのは、實在のファウストと同じ時代の、フランスの醫者で星學者だつた人の名だが、このあたりの宇宙表象の描寫は、その實、ゲーテが彼と同時代のスウェーデンボルクの神祕説に據つて書いたのださうで、さういつた詩人の特權は方々に用ゐてゐる。地靈(第四八二行以下)は、初期の構案には、「世界と活動の靈」となつてゐる。それ／＼の天

體には、そこに住む靈たちを統べる支配的な靈があるといふ鍊金術などの考へ方を採り入れたものといふ。物語本にも名に見える助手のワアグネルに、ゲーテは彼の仲間の輕んじたライブチヒのゴットシェト教授そのほかの、形式主義的な街學者の姿を與へてゐる。

「夜」の後半からあとの空白を滿たしたのは、二十何年後のゲーテである。この期間に、彼は解剖學や植物學に進化論を導入して、その時代の最大の科學者の一人にもなり、文學の上では、成熟した古典主義者にもなつた。知識の極限に立つてなほ滿たされない主人公を描くための、客觀的な根據をもち得たわけである。この場の終りの、とりおろした水晶の盃に主人公がものを言ふあたりから、復活祭の鐘と合唱の間を縫ふ獨白、それから「町の門の前」に移つて、殊に「氷から解き放たれた……」(第九〇三行)以下の早春の野と人の描寫や、「おゝ、おれが翼を獲て……」(第一〇七四行)以下の夕日を追つて飛ぶ幻想のくだりを讀むと、この時期のゲーテが、ホメロスの境地をめざしてゐることが、よく窺へる。第九九八行からあとのファウストの父の經歷は、ノストラダムスがプロヴァンス地方のペストを防いだ記録を轉用したのであるらしい。傳説本のファウストの父は、百姓である。

つづく書齋の二た場面も、すぐれた哲學的な内容を高い飽和度のまゝ詩のなかに溶かし切つた美しさにかけては、文學史にも例が少いと思はれる。主人公の譯しなやむのは、約翰傳の序章の「始めにロゴスありき」といふ個所で、マルティン・ルテルは、ロゴスを「言葉」と譯してゐる。

メフィストフェレスとは、ギリシヤ語で、光を愛さない者とか、ファウストを愛さない者とかの意味だといふが、はつきりしない。旅修業の學生を氣どるのは、傳説本にもあることだし、ゲーテが書かずに仕舞つた講堂の討論の場面にも同じ扮装で登場する筈だつたのである。その場がないため、やつと禁厭きんあつをやぶつて逃げたメフィストが、すぐまた戸をたくといふ構成上の不手際が出来た。ペンタグラマペンタグラマ(第一三九六行)といふのは、よく子供が一筆書きに書く五角の星形のこととで、俗説では、三角形を三つ重ねたやうにも見えるから、つまり三位一體で魔除けになるといふ。

三度目の書齋は、稿本の時に先づメフィストと學生の對話が出来、中間制作で「全人類に頌ち與へられたものを」(第一七七〇行)以下がその前に書き足され、定本の時に首尾一貫した。學生は、ライプチヒヤシュトラスブルヒに學んだ頃の氣の散りやすいゲーテ自身の似顔繪ださうで、初稿にあつた下宿屋なぞの冗漫な描寫は削られ、その代り半分だつた學科の話が、四つの科目を描へた。メフィストの特徴は、ヘルテルの嘲笑好きな半面をうつしたともいひ、それ以上に、メルクといふ警拔な批評家から取つたともいふ。この場の賭けに對しては、第二部の終り近く、やはり主人公が刹那に向つて、「立ちどまれ、おまへは實に美しい」と言ふ時が來るのである。

實在のファウストは、時の學者に愚民を惑はす詐欺師と罵られながら町々をめぐり歩き、ライプチヒにも來たといふが、酒樽を乗りまはす話は、もう傳説の領分である。ゲーテは、こゝに學

んだ頃、酒場の壁にかゝつたその傳説の繪を見てゐる。「アウエルバハの善」は、初稿は散文、斷篇では韻文になり、初稿でファウストの行つた魔術は、すべてメフィストに移された。「蚤の歌」は、譯詞によるムソルグスキーの作曲が、有名である。

ゲーテがイタリーにのがれて藝術家として再生した時に、ファウストの若返る「魔女の厨」を書いたのは偶然ではあるまい。古代ギリシヤと復興期イタリーを溺れるやうに愛したその頃の彼には、北方の霧のなかの中世がかつた傳説が、少々滑稽に思はれたらしい。魔女のしぐさは、舊教の儀禮を暗示してゐる。初稿には、この場に當るところに、遍歴中のファウストとメフィストを素描した「街道」といふ小場面があつた。

「街」以下を、一般に「グレーチヒエン悲劇」と呼び慣はしてゐる。グレーチヒエンとは、マルグレーテといふ名の後半分に、ヒエンといふ愛稱の語尾を添へて、いはば、ちゃん附けにした呼び方である。傳説本の後期の版に、ファウストが近所の貧乏で美しい町娘(一本では下女)に心をうつして悪魔に妨げられる話があるのと、ゲーテが少年の頃に思ひを寄せた故郷の小料理屋の娘がグレーチヒエンといふ名で、その思ひ出が禮拜堂や糸車と結ばれてゐると、シュトラスブルヒの大學時代に戀したフリーデリケ・ブリオンといふ牧師の娘を、自分の成長のためにふり捨てた罪の意識が、ながく心から離れなかつたのなどが、グレーチヒエン悲劇の前提となつてゐる。イ

タリーで出来た「森と洞窟」の大部分と、定本の時に加はつた「ワルブルギスの夜」の二場とワレンティンの死ぬ場面とを除けば、グレーチヒエン悲劇は稿本のなかでほとんど書きあがつてゐたとも言へるのである。

こゝには、ホメロスと業をあらそふ古典主義者はゐない代りに、工匠詩人のハンス・ザックスに學んだ素朴な民族的な詩形を驅つて、復興期ドイツの小都會のつましやかな生活環境を描いた青年詩人がゐる。「夕」の「ようこそ、なごやかな黄昏のいろよ」(第二六八七行)に始まるフアウストの獨白や、「庭」の場面で女主人公のする毎日の生活のうち明け話や花うらなひのくだり、「マルテの庭」の宗教についての二人のやりとりなどを讀むと、やはりゲーテが、「若いウエルルの悩み」と同じ時代に、グレーチヒエン悲劇を書いて置いてくれたことを、世界文學の幸福と思はずにはゐられない。

ギリシャ風の詩形で書き足された「森と洞窟」の獨白は、シシリ島で植物變形論の着想を掘んだあとのスピノザ主義者のもの靜かな自然觀照を表はしてゐる。そのさきの對話のうち、「薔薇の樹かげに草を喰む仔鹿の雙子」(第三三三七行)といふのは、舊約聖書の雅歌にある乳房の形容である。

「グレーチヒエンの部屋」の糸車の歌は、シューベルトの作曲が名高い。

「城壁裏」といふのは、町の外圍ひと内壁の間の、或は防壁が一重なら、それと家並みのはづ

れとの間の空き地の意味で、もとは負傷者の慰めのために聖母を祭つたものといふ。

「伽藍」の終りで、グレーチヒエンが氣つけ薬を求めるのは、その頃の女參詣人の間に、勤行の長さにそなへて喫き藥の小壘を用意してゆく習慣があつたからである。

「ワルブルギスの夜」とインテルメッツオとは、古典主義時代の筆になる。ワルブルギスの夜とは、聖女ワルブルガの名にちなんで五月一日の前夜を言ふが、古代のケルト教徒は、この夜プロッケン山に集まつて春の女神に生贄をさしげ夜どほし祭を祝つたのを、キリスト教の方、魔もの行事と見做されたのださうである。だから後の傳説で、魔女の乗つて飛ぶ箒や鐵把は、異教の禮拜と縁のある品で、山羊や豚は、その夜の生贄だつたのだといふ。ゲーテは、三度登山の經驗があつて、自然描寫も正確だといふことである。この魔の山に、彼の作品を屬つたフリードリヒ・ニコライといふ批評家が、「尻から幽霊の見える人」といふ名で登場させられる。低俗な啓蒙主義者で、時と幻覺に悩まされたのを、醫用蛭に尻を吸はせて治癒した經驗があるからだとか。

「ワルブルギスの夜の夢」は、もと別な詩集のために書いたのを、こゝに收めたのである。ゲーテにすれば、この生涯作の何處かしらに、その頃の政治の動きや哲學の流派の争ひや、はては自分の文壇での喧嘩相手などまでを諷刺した一幕を、記念に挿んで置きたかつたのかも知れないが、洒落つ氣が過ぎた形である。ゲーテが一緒に仕事をしたワイマールの大道具師のミーディン

グの名が出たり、長たらしい旅行記ばかり書くニコライがまた旅人になつて出て、イエスイット嫌ひをからかはれたり、ゲーテやシルレルの諷刺詩の悪口を言つたヘンニングスといふ記者や、その人の編輯した「ミューズの長」とか「現代の守護神」とかいふ取るに足らない出版物までが顔を出す。

「断篇」は、「伽藍」の終りで切れてゐて、初稿にあつたそれ以下の部分が収めてない。初稿では、「曇り日」も「牢獄」も調子をつよい散文なので、その直接的な効果が、イタリー旅行後のゲーテの気分にはそくはなかつたからであらう。「牢獄」は、定本の時に韻文にやはらげられ、作意が「羅」を透いて光る「やうになつたが、「曇り日」の語氣のつよさは韻律に移しにくいので、これだけは最後まで散文で残つた。

「牢獄」の幕切れの「この女は裁かれたのだ」(第四六一行)といふメフィストの叫びに答へる「救はれたのだ」といふ天上の聲は、初稿にはなかつたのである。

歌劇では、グノーの「フアウスト」、ベルリオーズの始めはカンタータの形で書いた「フアウストの劫罰」、ボイトの「メフィストフェレ」、歌劇以外では、リストの「フアウスト交響曲」などが、多かれ少かれゲーテの作に據つてゐる。挿繪では、ドラクロアの有名である。

翻譯には、私なりの苦心を拂つたつもりである。歌詞の部分に二つ三つの例外があるほかは、原文と譯文との間に、一行も詩形が狂はせてないこと、劇詩といふものの性質上、セリフの聽覺的な響き方にも氣をつけたことなどが、この翻譯のとりえであらう。

昭和十八年六月

11049



フアウス下
第一部

昭和二十三年二月一日印刷 昭和二十三年二月五日發行	譯者 久保榮	發行者 栗本和夫	印刷者 小酒井益藏	印刷所 研究社印刷所	發行所 中央公論社
定價一五〇圓	東京都新宿區神樂町一丁目二番地	東京都千代田區丸の内二丁目二番地	東京都新宿區神樂町一丁目二番地	東京都新宿區神樂町一丁目二番地	東京都千代田區丸の内九ビル五階 振替口座 東京三四番

終

人正-57
-79